



「屁理屈」

正しいことを正しいと説明するとき「こうなるから、こうなります。ですから正しいです。」と筋道を通して話していきます。聞いている人の誰もが納得できる「理屈」がなければいけません。

それに対して、正しくないことを正しいと説明するときには、正しくないものを正しいとしますので、どこかで詭弁をつかうことになります。詭弁と同じような意味で屁理屈があります。どちらも正しくないものを正しいことのように見せかけたり、自分の意見に相手を言いくるめるときの話し方や考え方を言います。

雑巾を足で拭いている生徒がいて、教員が「雑巾は手を使って拭きましょう。足で拭くのはやめましょう。」と当たり前の注意をしたときに「先生、足で拭いてはいけないという法律があるのですか？私は法律には従いますが、先生の個人的な倫理観に従う気はありません。」などと反抗して足で拭き続ける生徒がいたとしたら、屁理屈を言って自分を正当化する見本のような事例となると思います。足で拭いていることが法律違反などと誰も言っていません。雑巾は手で拭くのが常識であることを伝えて注意しているのです。常識と法律という異なるもので比較して、法律に書かれていないことは何をしてもよい、とすり替えてしまったことが理屈にならない「屁理屈」ということになります。

大人になると、理屈をいう人は多いですが、理屈に「屁」がつく「屁理屈」をいう人は少なくなります。なぜなら大人の世界では「屁理屈」が通らないことが普通だからです。「屁理屈」でなく「理屈」が言える生徒になりましょう。それが大人になる一歩にもなるのだから。